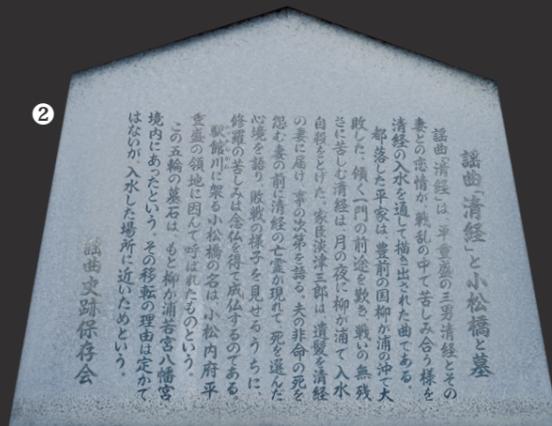


特集 御殿灯籠



① 担いで運ばれる御殿灯籠 ② 小松橋たもとにある平清経伝説が書かれた駒札 ③ 明治期の御殿灯籠（複元：県立歴史博物館所蔵）

長洲の夏の風物詩 「御殿灯籠」

日本に古くから伝わるお盆。現在では、夏の連休としての意味合いが強く、本来の意味を知らない人も意外と多いのではないだろうか。

お盆とは「盂蘭盆会」の略語で、故人や祖先の精霊があつた世と呼ばれる世界からこの世に戻ってくる期間のことです。生前を過ごした場所、主に自宅でお迎えして、ともに過ごし、生前の御恩に感謝し思いをはせる大切な機会となっています。

故人が亡くなって四十九日が過ぎ、初めて迎えるお盆を初盆と言います。死後1年経たない精霊は新仏と呼ばれ、まだ生前の恨みや心残りを抱えて成仏できずにいるといえます。初盆では、新仏が無念を捨て成仏できるように、通常のお盆よりも丁寧に、華やかに迎えするのが一般的です。

長洲地区には、初盆家庭で飾られるきらびやかな灯籠があります。長い歴史があるとされるその灯籠は、その豪華さから「御殿灯籠」と呼ばれ、地区内で文化として深く根付いてきました。

そんな御殿灯籠ですが、人口の減少や風習の変化、職人の後継者不足などが原因で、かつてはいくつもあつた工房が現在、たった一つになってしまっています。今回、御殿灯籠の取材を通して、さまざまな「思い」が込められていることがわかりました。

の嫡男で「小松殿」と呼ばれた重盛は豊前国を領土としていました。長洲地区の玄関口とも言える小松橋はそこから命名されています。また、重盛の子、清経は平家一門の都落ち、前途に悲観して、柳ヶ浦の沖合に船を漕ぎ出し入水したと伝えられています。

最盛期へ

明治期における御殿灯籠は、幅1mほどと小さく、現在のものと比べると家屋も少ない簡素な作りでした。それが戦後以降、現在のようないち豪華な作りになったといえます。その頃は、灯籠を作る工房がいくつもあり、1年に何十もの御殿灯籠が作られ、工房同士が技術を競い合い、見せびらかすように、より大きく、より豪華になっていきました。

昭和30年代には、ポスターで周知したり、8月15日に観光バスが何台も来て、多くの見物客でにぎわうなど、長洲の精霊送りは、観光行事としても認知されています。30年ほど前までは、長洲地区ではほとんどの初盆家庭が御殿灯籠を注文し「借金してでも豪華な灯籠を作れ」と言われるなど、欠かせないものとなっていました。

長洲の初盆

御殿灯籠は、華やかに彩られ、神社仏閣を模した家屋や滝、松と梅、橋などを配置し、大きいもので幅およそ3mもの巨大な灯籠です。木と紙でできており、そのほぼ全てを職人たちが3カ月かけて手作りします。金額は50万円以上と大変高価なものです。

灯籠には新仏が宿るといわれ、お盆の間、初盆家庭に飾られます。その後8月15日に親族・友人らによって共同墓地まで神輿のように担いで運ばれた後、惜しげもなく燃やしてしまいます。これが長洲地区伝統の精霊送りです。このような灯籠、精霊送りは全国的にも珍しく「長洲の初盆行事」として、平成28年3月に国の選択無形民俗文化財になっています。

平家伝説

御殿灯籠の起源については、定かではありません。しかし、今から800年以上前、源平の戦いに破れ、長洲に落ち延びてきた平家の落人が一門の霊を慰める思いから、また京の都を偲んで始めたと言いつまわれています。

宇佐市には平家にまつわる伝説がいくつも残っています。平清盛

長洲の精霊送り



① 伝統が次世代の胸にも刻まれます ② 盆口説きを唄う親族。口説ける人が減り、貴重な存在に ③ 墓地へと運ばれる御殿灯籠
④ 墓地に到着後、最後のお別れを言うように虹が出ました ⑤ 燃え尽きる御殿灯籠

御殿灯籠作り

御殿灯籠作りは、5月の連休後、木材を加工することから始まります。寸法通りに切っていく、その木材同士を組み合わせて神社仏閣を模した家屋の骨組みを作っていきます。その骨組みは寸分の狂いもなく生まれ、落としたりぐらひでは壊れません。木材を加工する道具は、職人たちが作業しやすいように手作りしています。

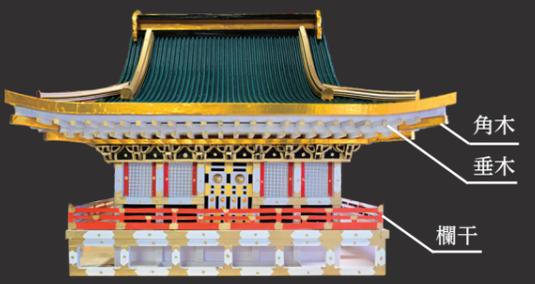
骨組みが完成すると赤、白、黒の絵の具やペンキで下塗りを行います。その後、下張り・裏打ちを行います。各家屋の寸法に合わせて切った紙を、建物に見えるように空間部分に張り付ける作業です。

その後、家屋の外側の装飾をしていきます。片面ダンボールを深緑に色付けして作った屋根や細かい模様があしらわれた扉、厚紙を朱色で塗り切り抜いて作る欄干などさまざまな装飾を施していきます。また軒下には垂木や角木が張られ、本物の神社仏閣が忠実に再現されています。

現されています。細部までこだわり、手間を惜しまず、故人を送る思いが込められています。一方、少ない人数で納期までに作業を終わらせる必要があるため、昔から色付けや張り付け後の乾かす時間ロスまで計算し、無駄の無いよう作業工程を組み、流れ作業する仕組みが確立されてきました。

各家屋の装飾作業が終盤に差し掛かる頃には土台を作り始めます。依頼主の家の間口・高さに合わせて、木材を加工し組み立て、正面から見える台座部分を黒く塗装し、金箔や金具で装飾します。土台の完成後、装飾された家屋や障子紙で作った扇風機のモーターで動かす流れる滝、背景の山や月などを配置して御殿灯籠は完成します。

一切妥協せず、手間暇かけて作った自信作を燃やしてしまうことについて、職人たちに尋ねると「燃やすために作っているのです、名残惜しさはない。それが当たり前になっっている」と口をそろえます。それほどまでに文化が深く根付いているのです。



8月15日、お供物とともに自宅前に出された御殿灯籠は、しばらく披露された後、親族、友人らによって共同墓地まで歩いて運ばれます。死者の霊を慰めるといわれる盆口説きを唄い、太鼓を叩きながら、にぎやかに進みます。真夏の猛暑の中、大人はお酒、子どもはジュースを飲みながら、まるでお祭りのような明るい雰囲気です。

共同墓地に到着すると、御殿灯籠は墓前に供えられます。最後のお別れを済ますと、親族たちの手で灯籠に火が付けられます。燃え盛る炎は、送り火として新仏をあのお世へと送り届けるといえます。職人たちによって3カ月かけて手作りされた御殿灯籠は、木と紙で作られているため、わずか10分ほどで燃えてしまいます。灯籠が燃え尽きると、長洲の初盆は静かに終わりを告げるのでした。

みずえ ひでみ 水江 日出美さん ～亡父、梅本吉彦さんを送る思い～

父は家族思いの優しい人でした。生前「御殿灯籠は作らなくていい」と言っていたのですが、娘3人で迷うことなく注文することに決めました。やはり、尊敬する父に対する感謝の思いからでした。最後は明るく豪華に送り出してあげたいとの思いもありました。

灯籠は、本当にきれいで、細かいところまで丁寧に装飾されており、作ってもらって良かったと思いました。きっと父も喜んでくれたと思います。また、墓地まで担いで運べないため、船の形の台車まで用意してくれました。良い送りができて感謝しています。



御殿灯籠を囲む梅本家の皆さん



存続の危機

30年ほど前、長洲地区にいくつもあった工房も、人口の減少や風習の変化などが原因で、近年では工房が一つだけになっていました。その工房の所有者である松成榮勝さんが3年前に亡くなり、御殿灯籠は存続の危機を迎えます。地区内では「御殿灯籠はもうない」とまで噂されました。そこで立ち上がったのが、松成さんの工房を長年手伝っていた中野さんと加嶋さんでした。二人は工房の共同経営者として、松成さんの後を継ぎ、伝統を守り続けることを決心します。



なかの しんや
中野 真也さん

でも松成さんを手伝い続けたのは、学生時代からバイトで来て、教えてもらったことに対する、感謝、恩返しですかね。また妥協しない姿勢を尊敬していました。

きっかけ

学生時代の約30年前、松成さんの工房で御殿灯籠作りの手伝いを始めました。その当時は、工房がいくつかあり、学生たちが灯籠作りのバイトをするのが長洲では割と当たり前でした。20人ほど高校生がバイトしていました。社会人になってからも、毎年欠かさず仕事が終わってから、灯籠を作っていました。

継承へ

師匠である松成さんは、職人気質の厳しい人でした。細かい部分にもこだわる人で、京都の神社お寺を見て歩き、忠実に再現することを目指していました。そのため自分の望む出来にならなかつた場合にはよく怒られました。それ



かしま ひろき
加嶋 洋喜さん

仲間とともに

大学生の頃にバイトで手伝って以降、約40年間灯籠作りに携わっています。その後、両親も松成さんを手伝うようになり、現在では、叔父、妻さらには子どもたちと親族総動員で手伝ってくれています。灯籠作りは家屋の数も工程も多く、決して一人ではできません。それぞれができる作業を分担しながら進めています。前例に囚われることなく、みんなで意見を出し合い、効率の良い方法を模索しています。大変ですが、熱い思いを持った仲間たちと楽しみながら灯籠を作っています。

御殿灯籠への思い

松成さんが亡くなり、中野さんから継承するかどうか相

でも松成さんを手伝い続けたのは、学生時代からバイトで来て、教えてもらったことに対する、感謝、恩返しですかね。また妥協しない姿勢を尊敬していました。

松成さんから、亡くなる3日前に電話があり「後を頼んだ」と言われました。しかし、仕事をしながら引き継げるか不安であったため、即答はできませんでした。また灯籠作りは流れ作業であるため、一人ではできません。そのため、工房の仲間と相談し、みんなで存続させようということになりました。自分たちが作らないと御殿灯籠は永遠に無くなってしまおう、生まれ育った長洲の伝統文化を残したいという思いでした。

作り手としての思い

御殿灯籠作りは、複雑で細かい作業なので大変ですが、苦にはなりません。毎年完成したときには達成感があり、依頼主が喜んでくれたときには何ともいえない満足感があります。また全国でも例を見

談されました。物心ついたときから当たり前にある文化が無くなってしまふのは寂しい、もったいないという思いでした。御殿灯籠には、仏様が宿るといいます。また依頼主は故人への感謝の思いを込めて注文してくれまふ。そのような思いで作れることは大変有難いことです。だからこそ、飾るのは短い期間ですが、みんなに喜んでもらえ、記憶に残るような美しく立派な灯籠を作りたいと思っています。

今後について

松成さんが亡くなったとき、図面も無く、前年に作った家屋の寸法を測りながら製作したため、苦労しました。そこで現在、各家屋の設計図のデータ化を進めています。私たちが作れなくなったとしても、やる気のある人が出てきて、それを見て作ってくれすることも期待しています。

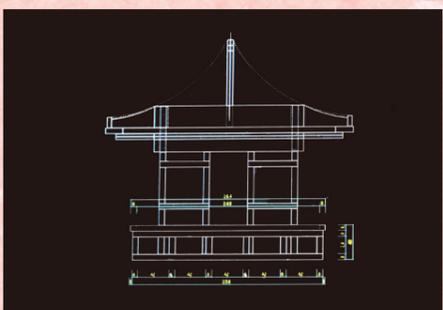
また注文数が減っている一因として、人が少なくなっ

ない珍しいものを作っているという誇りもあります。ただし、注文してくれないことは、いくら作り手がいても存続することができませんので、灯籠を注文してくれる方には感謝しかありません。依頼主に良い送りをしてもらいたい、そのためにも美しく、正確に作ることにこだわっています。



製作途中の家屋。10種類以上もあり、その装飾は全て異なるため大変複雑です。

お墓まで担いでいくのが困難になっていくことが挙げられます。そのため、船の形をした台車を用意し、押しで行ける形式を取り入れました。伝統を継承するためには、時代に合わせた工夫も必要です。さらに毎年全く同じものを作っている面も面白くないので、色違いを作ったり配置を変えたりと遊び心を加えるようにしています。今年も故人が漁師をしていた依頼主からの要望で、家屋だけでなく、船を初めて配置する予定で動いています。注文の際に要望があれば、できるだけ要望に応えた、新たな灯籠作りにも挑戦していくつもりです。



データ化した設計図

さまざま

思いが形に

思いは目に見えず漠然としているため、普段意識することがないかもしれません。しかし、人間の行動には必ず思いが伴い、誰しもがさまざまな思いを抱えて生活しているはず。平家の落人が始めたとされる御殿灯籠は仲間、都を偲ぶ思いが形になったものです。

そのような長い歴史がある御殿灯籠にも現代の社会問題の影響が及んでいます。例えば担ぎ手の不足。昔は親族も多く、若手の男性8人ほどで交代しながら担いで墓地まで行っていました。現在は過疎化、高齢化により担ぐのが困難となる家庭もあります。同様に盆口説きを唄える人が少なくなり、その方たちも高齢化しています。さらには、景気の悪化

によって儉約志向が強まり、高価な御殿灯籠は時代に逆行するものとなっていきます。

そんな逆風のなか、職人たちは灯籠を作り続けています。その裏側には熱い思いを持っています。自分たちの生まれ育った地域の貴重な文化を絶やすわけにはいかなという責任感や依頼主に対する感謝、良い送りをしてほしいという願いを持っています。また、師や仲間に対する敬意や次世代に期待する思いもあります。送り出す依頼主もまた、故人に対する敬意や感謝、明るく豪華に送り出したという思いを込めて注文します。

人々のさまざまな思いに支えられ、存続している御殿灯籠。それは「思いの化身」とも言える、とても尊いものでした。